

# 異端の源流シモン・マゴス(Simon Magus)

栗原貞一

## I シモン・マゴスなる人物

異端の源流としてシモン・マゴスの名がグノーシス (gnosis) の一派に結びつけられるのは歴史的に根拠があるのか、また使徒行伝にマゴスの記事があり、また殉教者ユスティノス・ヒッポリタス、エピファニウス、テルトゥリアヌス等の異端に関する論文から発生しており、またヂシッポスの異端リストからであろう。

呪術師シモン・マゴスは都から少し離れたギットというサマリヤの一寒村に、アントニウスとラケルの子として生れた。伝説によればシモンはマカビー家の時代に現われた宗教家ドシテウス (Dositheus)<sup>2)</sup> の門弟で、ドシテウスはシモンより年長であったと想像される。ドシテウスは施洗者ヨハネの同僚として活躍し、シモンもドシテウスと共にヨハネの友として、ヨハネの三十人の弟子として最も高く評価されたといわれる。ヨハネが殺された後は、ドシテウスはシモンの頭の上に手をおいて、シモンがエジプトから帰国するまで慎重に配慮して、おも立った三十人の弟子の最高の地位に置いた。

シモンはエジプトのアレクサンドリアにて呪術の究学ののち、故郷サマリヤに帰った。

シモンの師ドシテウスの説はユダヤ教とギリシア密教の調和を計ったもので、これはその以前にサマリヤで行われていた離婚にも、またシリヤの知事ピニウスが紀前二五年にサマリヤの町を再建、ローマ皇帝アウグストスの記念としたことにもうかがわれる。このため必然的に生じたユダヤ人とギリシア人の混合は、純粹のユダヤ人の憎しみを買ったが、一方ギリシア密教やグノーシスの侵入には好都合であった。

シモンについての使徒行伝の第八章一節以下を引用すれば

「サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた。その日エルサレムの教会

に対して大迫害が起り、使徒以外の者はことごとく、ユダヤとサマリヤとの地方に散らされて行った。……さて、散らされて行った人たちは、み言を宣べ伝えながら、めぐり歩いた。ピリポはサマリヤの町に下って行き、人々にキリストを宣べはじめた。群衆はピリポの話聞き、その行っていたしるしを見て、こぞって彼の語ることに耳を傾けた。汚れた霊につかれた多くの人々からは、その霊が大声でわめきながら出て行くし、また、多くの中風をわずらっている者や、足のきかない者がいやされたからである。……さて、この町に以前からシモンという人がいた。彼は魔術を行ってサマリヤの人たちを驚かし、自分をさも偉い者のように言いふらしていた。それで、小さい者から大きい者にいたるまで皆、彼について行き「この人こそは『大能』と呼ばれる神の力である」と言っていた。彼らがこの人について行ったのは、ながい間その魔術に驚かされていたためであった。ところが、ピリポが神の国とイエス・キリストの名について宣べ伝えるに及んで、男も女も信じて、ぞくぞくとバプテスマを受けた。シモン自身も信じて、バプテスマを受け、それから、引きつづきピリポについて行った。そして、数々のしるしやめざましい奇跡が行われるのを見て、驚いていた。」

さらに使徒行伝の記事によれば、

「エルサレムにいる使徒たちは、サマリヤの人々が、神の言葉を受け入れたと聞いて、ペテロとヨハネとを、そこにつかわした。ふたりはサマリヤに下って行って、みんなが聖霊を受けるようにと、彼らのために祈った。それは彼らはただ主イエスの名によってバプテスマを受けていただけで、聖霊はまだだれにも下っていなかったからである。そこで、ふたりが手を彼らの上においたところ、彼らは聖霊を受けた。シモンは、使徒たちが手をおいたために、御霊が人々に授けられたのを見て、金をさし出し、「わたしが手をおけばだれにでも聖霊を授けられるように、その力をわたしにも下さい」と言った。そこで、ペテロが彼に言った、「おまえの金は、おまえもろとも、うせてしまえ。神の賜物が、金で得られるなどと思っているのか。おまえの心が、神の前に正しくないから、おまえは、とうてい、このことにあずかることができない。だから、この悪事を悔いて、主に祈れ、そうすればあるいはそんな思いを心にいだいたことが、ゆるされるかも知れない。おまえには、まだ

苦い胆汁があり、不義のなわ目がからみついている」。

シモン・マゴスは上記のように聖霊を授ける権威を金で買うとして、ペテロに叱責されたのであるが、その後シモンはペテロの反対者となり、また教会内のグノーシス派発生の源流となり、また影響を与えた。ペテロとヨハネ両使徒が望んだのは、

「異邦人の道に行くな、サマリヤ人の町に入るな」(マタ、10.5)というガリラヤ伝道に際してのイエスの命令は、復活のイエスの「ただ、聖霊があなたがたに下るとき、あなたがたは力を受ける、エルサレム・ユダヤとサマリヤの全土、さらに地の果まで、わたしの証人となるであろう」。(使徒1.8)

「わたしは天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子になして、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し(マタイ、28.18-19)また「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」。(マルコ16.15)

という新たな命令におきかえられ、これが実践されたのである。イエスの名によってバプテスマを受けると同時に聖霊を受けるとするのは、初代教会の普遍的な信仰であった。(使徒2.38, 10.44-48, ロマ書6.2-) 聖霊は使徒の按手によって与えられるという信仰が働いていたと見ることができる。(使徒6.5.6) 今はローマキャソリック、東方正教会、聖公会等歴史的な主教制度を継承している教会の中には、主教制の聖書的根拠として、使徒の後継者としての主教による按手を通して、初めて教会のなかに聖霊が正しく伝わるという理解の仕方が強い。シモンはこの聖霊の働きに強く感銘を受け、金をもってこの力を譲り受けようとした。宗教的な霊的な力を金をもって得られると考えたいわゆるシモニア(Simonia)の元祖であった。シモニー(聖職売買<sup>3)</sup>)という言葉は上記のシモンの記事に由来するものである。

かくして、福音は当時一般的に行われていた呪術的宗教を克服した第一歩であり、このことは、宗教の歴史において霊の力を不純化することを、きびしくいましめたことに、重要な意味をもっているといわねばならない。

## Ⅱ 呪術について

聖書には魔術と記されているが、宗教学の用語としては呪術が適切である。呪術とは普通の人を持っていないある神秘的な霊力を有しているものが、神、精霊などを意のままに、自身の有利な方向に導くために行う異状な行為を呪術と呼ぶのである。このことは呪術者の方が、神や精霊よりも能力においてすぐれていることを意味し、ついに呪術者自身が神にまでなるようなことになる。シモン・マゴスのごときは、その最も典型的な例である。当時の世界においては、霊界と交りたいとの願望は普遍化した現象と見なしてもよいと考思される。パウロも伝道地において、しばしば、この種の人々に遭遇している。その例を示せば、

「ふたりは聖霊に送り出されて、セルキヤにくんだり、そこから舟でクプロに渡った。そしてサラミスに着くと、ユダヤ人の諸会堂で神の言を宣べはじめた。彼らはヨハネを助け手として連れていた。島全体を巡回して、バ波斯まで行ったところ、そこでユダヤ人の魔術師、バル・イエスというにせ予言者に出会った。」(使徒13.4-6)

「それから、魔術を行っていた多くの者が、魔術の本を持ち出してきては、みんなの前で焼き捨てた。その値段を総計したところ、銀五万にも上ることがわかった」(使徒19.19)

これらの呪術師たちの教義は、ユダヤ、ギリシアおよび東洋思想の混交物であって、神秘的な黙示を受けるものと自称した。

シモン・マゴスがピリポから洗礼を受け、聖霊の賜を授ける特権を買収しようとして、ペテロに一喝されたことを前述したが、これは使徒たちが、シモンより深奥な秘密を知り、彼よりも呪術力がすぐれていることを感じとったからに外ならない、と同時にシモンはキリスト教の聖霊に対する理解に欠け、呪術的な力を重点的に願望したことにある。

さて、フェニキヤのツロの妓楼において、シモンは朧たけき美貌の遊女ヘレナを見出しこれを買収し、すべてのものの母であり、大天使であって神として尊ぶべきものであるとなえ、相たづさえて、ローマ帝国内の各処を巡遊した。ローマ皇帝クラウディウス (Claudius, 41-54) の治世の時ローマに来た。チベル河中の一嶼島に彼の彫像が立てられていた。<sup>4)</sup> 伝説によればクラウディウス帝の時、ローマにおいて、シモンはペテロとパウロに会い彼らと討論して屈

服せられたが、彼の呪術的偉力によって、ローマに住したサマリヤの多くの弟子たちによって建てられたものであろう。

### Ⅲ 皇帝ネロとシモン・マゴス

マルケルススの仮名作者によって書かれた『聖ペテロと聖パウロ行伝』の記事のうち、キリスト教に改宗したアグリッパの妻の話とネロの妻のことが記されているが、シモンとペテロの対決の記事があり、この対決とネロのキリスト教徒迫害との関係を要約すれば、ペテロとパウロの霊の力に嫉妬したシモン・マゴスは、これに対抗して多くの奇跡を行なったが、事態は解決を見なかったので、お互に香具師とかペテン師呼ばわりをした。この争いを耳にしたネロは、シモンを召喚した。シモンは皇帝の目の前でさまざまな魔術を行って、ネロの信頼を得た。この時からネロは、シモンを神の子と考えるようになった。ネロはペテロとパウロを宮廷に呼びつけ、シモンと対決させた。シモンはペテロとパウロに向って、《この二人はナザレ人イエスを押し立てて、ユダヤ全体を煽動した》と非難した。ペテロはシモンに答え、《そんな嘘を言ってもごまかされはしないし、おまえはキリストの弟子たちに勝つことは不可能だ》、キリストという名前を耳にしたネロは《そのキリストとはだれだ?》とたづねた。ペテロは《ピラトがクラウディウス皇帝に送った書簡を調べるように》とだけ答えた。ネロはこの書簡を持ってこさせ、それを読んだ。それからペテロは、シモンに言った。《キリストは神であり人間である。シモンは人間であり悪魔である》と。

ネロは自分の味方であるシモンを弁護して、《自分は彼の技を見て知っている、彼はまさに神である》と。するとペテロは試合を申し出た。ネロが承知したので、ペテロはひそかに一片のパンを手に入れ、それを祝福して、袖の中にかくした。ほどなくシモンは、二頭の巨大な犬を出現させ、犬をペテロにむけて飛びかからせた。しかしペテロが犬に、祝福されたパンを袖からさし出すと、犬は煙となって消えうせた。ネロはペテロに勝を宣し、シモンの敗北を認めた。しかしシモンはこの判定を受け入れず、《もし自分のために塔をつくってくださるなら、天使たちに助けられ、天空を父なる神のところまで登って行ける》といい張った。ネロは承知し、マルスの原に大きな夢幻的な塔が一つ建

てられた。シモンはそれに登り、ネロに向って、《自分のところまでこられるように、皇帝にも天使たちを送る》と約束した。のち翼をひろげて天空に飛び去った。ネロは《彼は神だ》と叫んだ。パウロは涙を流してペテロに仲立ちをたのんだ。ペテロはひざまづき、シモンを支えている天使たちに彼を手離すように祈った。ペテロの祈りはきき入れられてシモンは神聖道のうえに落ち、四方にくだけ散った。ネロは激怒して、使徒たちを捕縛させ、彼らを殺すように命じ、かつキリスト教徒たちの迫害をはじめた。<sup>5)</sup>

#### Ⅳ キリスト教の多面性と統一性

キリスト教がユダヤ教とまったく分離して、キリスト教のうちに包含されている多面性が表面化して、複雑な変化に富む外観を呈するに至ったことは止むをえない現象であった。すなわち、キリスト教は一面において全智全能にして天地の創造主なる父なる神、御子なるイエス・キリスト、罪の赦し、肉身の復活、永遠の生命の宗教であり、また救世主による人類の救済、人間の神化の宗教、また博愛と慈悲、平和の宗教であり、また霊の宗教、かつ意志の宗教で、倫理と聖なる徳、絶対帰依の信仰の宗教であると共に、理性と明智の宗教、かつ神秘の宗教であり聖典の宗教でもあり、宗教と称し得べきあらゆる貴重なるものを含み、人間の要求するあらゆる宗教的本質的普遍的な内容を抱有していた。

しかし、キリスト教の豊富にしてかつ、その複雑さは、不可思議なほどであるが、それにもまして驚嘆すべきことは、この多面性の宗教が信徒の宗教的意識の中にイエス・キリストによって完全に統一されていたことである。実にイエスに基づき、イエスを中心として、キリスト教会内における霊的神秘的存在として意識されるようになったことである。

#### Ⅴ キリスト教的グノーシスについて

シモン・マゴスは前述せるとくサマリヤにおいてピリポより洗礼を受けたのであるが、サマリヤを立ち去ったのち、キリストの教説を彼自身の教えに混入しやすいものを転入して一種のグノーステックの教系をつくり、初期の教会に重大な影響を与えた一つの異端の開祖とその透導体となった。ピリポのサマ

リヤ伝道が教会史上に一紀元を開く由縁のものは、異邦人のキリスト教に帰依する第一着手であることは論をまたないが、また教会がグノースティックなものに始めて接触したことは重要な点として考えるべきであろう。

このような背景のもとに、グノーティシズム(gnosticism)が初期の異端的キリスト教、またはグノーシス派キリスト教について要約すれば、宗教を理智化しようとする傾向がしだいに一般的に強くなると、グノーシス派異端はその間の消息を示している。グノーシスなる語はキリスト教の真理、殊にその深い理解を意味する言葉として、新約聖書にも散見される。(コリ前1.5, 同12.8)使徒時代においてさえもこの聖書における真のグノーシスの他に起原の不明な誤れるグノーシスがあった。ケリントス、パシリデス等の第二世紀のグノーシス派諸異端の起原はさらに不明である。いずれにしても元来の用語は二世紀から三世紀にかけて「反異端論者」に由来する。この時代における正統的キリスト教徒が、異端を反駁する時にその異端の思想的特色を「グノーシス」と呼び、その主張者を「グノースティコイ」と呼んだ。(Irenaeus, Hippolytus, Epiphanius)

ユスティノスは、シモンを始めるとする多くの異端をサマリヤ人と彼らの魔術に遡源している。(apol., I. 26)そしてシモン、メナンドロス、マルキオンを含めての教説が異端である由縁は彼らがすべて悪霊(Demon)にとりつかれて「自らを神と称し」と。また、イレナイウスも、すべての異端はサマリヤのシモンに由来するといっている。(adv. haer. I. 23, 2)そしてその弟子であり教えを広げたメナンドロス、さらにヴァレンティヌスとマルキオンをグノーシスの創始者としている。(I. 11, 23-31)

この派の宗教的活動は知的考察と神秘的秘義的知識、経験を融合したものである。すなわち、われわれをして神に到達せしめる神秘的密義的知識を意味する。教説は派によって多少の差異があるが、一世紀後半から二世紀中葉までは各派を通じて共通点が二点あると考えられる。一つは無知な信徒にとって密儀的で魅惑力があつたこと、その二つは通俗的な教説であつた。グノーシスは単にキリスト教のみの問題でなく、当時ギリシア的宗教活動の総称であつて、いづれの宗教においても、グノーシス的活動があり得た。グノーシス主義の根本概念は、病める世界に救済をもたらし、かつ、内なる人、霊、すなわち人間に本

来的な本質の救済をもたらすことである。この活動の特色は第一に三つの世界観をもって構成されている。その一つはこの宇宙の最高存在は神であること。二は霊なる存在があること、三は物質である。したがって物質と最高存在である神との中間にある霊的存在中、最高なるものがロゴス(logos)つぎに天使、最底は悪魔でその中間に人間存在を規定した。かくして救とは、物質すなわち現象の世界に捕えられている人間が、最高存在である神に還り、神との完全な融合一致に達することであり、あるいは密儀的な方法による神秘的結合である。しかし悪魔なるものはこれを妨げようとして活動している。

キリスト教は人間をして、これに到達せしめ得る最高にして完全な覚智(グノーシス)である。しかし多くの妨害的存在、すなわち悪魔とその性質、その計画を見破り、これを征服するためには、いろいろな密儀的な手段方法が必要となってくる。この妨害者は無数であるゆえその覚智は複雑とならざるを得ない。かくしてこの神秘的グノーシスを与える最大にして最高の教師はキリストである。彼自身、悪魔の計画にすべて打勝ち甦って神に還り、人間をして彼によって同じように最高の存在である神に帰る道を知らしめたのである。この意味において彼は人類の救主である。

グノーシスには人間の意志の反逆または、墮落というような深刻な罪悪観がない。したがって個人的な罪の救いという体験もない。ゆえに個人的な罪の赦しという宗教的体験もありえない。このようなグノーシス主義の思想乃至思弁はキリスト教内に少なからざる悪影響を及ぼしたことは教会史が教えるところである。

## Ⅵ シモン・マゴスの教説

### 1. 「エノイア」と輪廻転生——

彼の思想は「エノイア」(Ennoia, 神の思想または目的、意志の意)なるものが、この地上的牢獄の汚濁に呻吟しているものを救うために、最高の天より降ってきたと説いた。

この「エノイア」は天使たちによって迫害されたため、いろいろの物質体に転寓をいくたびも重ねかさねられて、最後にヘレナの中にその居を占めた。シモンはヘレナをもって、異邦人を照す聖霊であり、同時にギリシアの女神ミネ

ルヴァであり、自分をジュピターと称した。かくして、シモンとヘレナは礼拝を受くべきものと説く。シモンの上記の思想の中にインドのバラモン教の輪廻転生 (Samsāra. transmigration of souls) 思想の影響が見受けられる。

## 2. 仮現説の思想——

シモンはイエス・キリストの死を仮現説<sup>6)</sup> (Docetism) をもって説明した。シモンを仮現説の源流として、その弟子サトルニウスを始めケリントス、バシリデス、ヴァレンティヌス、マルキオン等仮現説の異端の元祖となった。

## 3. 聖典の牽強附会の解釈——

シモンはモーセの律法は馬鹿げた不正なものであると考えた。モーセは、神は天と地とその万象が六日間に完成し、そして神のすべての作業が七日目に終わった (創2.1<sup>2)</sup>)

シモンはすでに明瞭な仕方で、彼自身を神の如く神聖なるものとして、三日目を太陽と月の前にもうけた。それゆえにシモン派の人々は心と知性の謎を語る。それは天と地でありそして七つの力がある。このことは明確でないことの一つである。これらの三つの力はすべての神の休息に先行する事柄である。しかしシモン派は言う「主が昔その作業をなし始められるとき、その作業の始めとして、わたしをつくられた。えにしえ地のいまだなかったとき初めに、わたしは立てられた。また海もなく、大いなる水の泉もなかったとき、わたしはすでに生れ、山もまた定められず、丘もまたなかったとき、わたしはすでに生れた」 (箴言8.22<sup>5)</sup>)

このような説明について彼は、七つの力は善を保持するための根拠なしにいい、今やこの七つの力、それは無制限に実在しているという。シモン派の人々は霊はそれ自身万象に包含されているという。無制限なる力の表象である。この表象は朽ちないものの実質であって、そして単に万物に秩序を保たしめる。

いかなる仕方で神は人間を形作ったか、パラダイスにおいてか、シモンは聖典に、「わたしはあなたをまだ母の胎につくらないさきに、あなたを知り、あなたがまだ生れないさきに、あなたを聖別し、あなたを立てて万国の予言者とした。」 (エレミヤ書1.5) 彼は人を母の胎に形造った。即ちパラダイスについて、私はこのことを肯定すれば、パラダイスは胎になる、エデンは後産のごと

きものとなる。エデンから川は四つに別れて流れる。《また一つの川がエデンから流れ出でて園を潤し、そこから分れて四つの川となった。》(創2.<sup>10</sup>)

これは四つの基本的な本質に別れている。そのどちらの側でも二つの動脈が位置され、霊の導管と二つの静脈の血液の通路である。かくしてシモンはことごとく聖典を身体の機能について自説の都合のよいように解釈した。

エデンの園から流れ出づる川は四つの本質に別ける。四つの流れは生れ出たものに属する四つの感覚である。即ち視覚、臭覚、味覚、触覚であって幼児はパラダイスにおいて、これらの感覚のみが形成されるのである。

第一の書『創世記』であるが、この書は宇宙の知識のためには充分である。第二の書『出エジプト記』は紅海(赤い血)を渡って進み荒野にいたり、にがい水を飲み骨の折れるそして苦難の運命の生活の内に知識にみちびかれ、即ちロゴスによってにがい水が甘味の水となると解釈する。

なお、シモンはモーゼが《あなたの神、主は、焼きつくす火、ねたむ神である》(申命記4.<sup>24</sup>) これは正しい意味ではない。彼はその火は創生の原理としての火と理解している。しかしシモンの陳述は火はつくられたものである。即ち火は神ではない。しかし火は激しく燃え、焼失し消滅する火、ゆえに現実にはセーセの律法の上に不自然な認識を表現するのみならず、あいまいなヘラクリタス(Heraclitus)的な剽竊ですら感ぜしめる。かくしてシモンは限界のない宇宙の力の始原の原理と述べ、火は神でないことを主張するのである。

かくのごとくシモンはすべて自身の都合のよいように聖典の解釈を牽強附会する。その根本にあるシモンの確信は、『the Recognitions of Clementine』(ii. 8)によれば、《シモンは彼自身崇高な能力をもっていると確信していることを信じ、それは創造神の上<sup>7)</sup>にあり、かつキリストであることをあくまで主張した》

『シモン・マゴスは、自己自身を最高神となえ、サマリヤ人には父として、ユダヤ人には子として、異邦人には聖霊として現われた』と説いたことによってもうなづくことができる。<sup>8)</sup>

(he taught that it was himself who appeared among the Jews as the son, but descended in Samaria as the Father, while he came to other nations in the character of the Holy Spirit)

と説いた。誠にこの大胆不敵自負の極みにして、神を冒瀆するものというべきである。

## Ⅶ シモンの死後と後継者

彼の死については、種々の説があるが、一説には彼は空中を翔けようとして地上に落ち負傷して死亡した。また一説には彼はイエス・キリストの復活と同一の事を行おうと公言して、自から二日の間土中に埋められたが、三日目に彼の弟子たちの眼前において復活することなく最後を遂げたと伝えられている。何年に死したかも不明の闇に葬られる。

シモンの弟子にメナンドロス (Menandros) がある。ユスティノスとイレナイウスの著作によって知ることができる。彼はシモンと同じようにサマリヤのカパラティア生れで、シリアのアンテオケにおいて活動した。彼の説は不可知説で最高の能力が天上界から救主としてあらわれたと教え、彼の行う呪術的密儀はそれに代るものであり、この密儀によって人々はこの世をつくった天使に打ち勝ち、永遠の若さと不死を得ることができると教えた。サトウルニヌス (Saturninus) やバシリレイデス (Basileidēs) の教師であるといわれている。のよう<sup>9)</sup>にシモンは異端の父祖として、またドケティズムとエビオニズムの源流の一つとして史上にその名を残した。

シモンを源流としてキリスト教史の中を流れるもろもろの異端思想はいかなる原因によって発生したのであろうか、その本質的なものは何であるのか、この問題については、いろいろの解釈が成立するであろう。

「ことばは肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまことに満ちていた。」(ヨハネ1.14)

ヨハネによる福音書の序章にあるこのことば、そして肉体となったみ言葉は、その受難、その苦悶の後に死に、そして文字となった。そして、ここに歴史上のキリストについての問題が提起されたのである。み言葉は書くことをしなかった。しかし、ギリシア化されたユダヤ人、ストア派やギリシア思想の感化を受けたパウロは書簡を書いた。パウロにおいて、み言葉は文字となり、福音は書物

となり聖書となった。この聖書にかかれた文字がその専横をふるうのである。文字は死んだもので、文字の中に生を求めることができない。靈魂の不滅、文字に書かれた魂、文字の精神の不滅は、異教の哲学のドグマである。ニカイア会議におけるホモウシオス (*ὁμοούσιος* 同質) とホモイウシオス (*ὁμοιούσιος* 類質) は明かに内容を表現する文字の悲劇的な争闘であった。このようにして宗教改革は正に文字の爆発であった。文字の中に言葉を回復しようと試み、聖書からみた言葉を、歴史から福音を抽出しようとした。しかし、実際に復活したのは、潜在していた古い矛盾であった。現代においてもこの矛盾の解決のためにたえず争闘が繰り返されているといっても過説ではないであろう。かくして、キリスト教の苦悶は果しなくつづくことであろう。

#### 文献略語

- D.C.D. Dictionary of Christian Biography.  
A.N.F. Anti-Nicen Fathers.  
A.N.L. Anti-Nicen Library. Edimburgh.  
H.E. Eusebius. Historia Ecclesiastica.

#### 註

- 1) パレスティナのユダヤ人キリスト教徒ヘゲシッポス (—180ごろ) のグノーシス派に対する反駁書である回顧録 (Hupomnēmata, 5. VOL.) の断片がエウセビオスの「教会史」の中に異端のリスト中に記されている。(H.E. IV. 22) その中にシモン・マゴスをグノーシス派としてクレオピウスと併記、また、殉教者ユスティノスの異端に対する『第一弁証論』 (the First Apology of Justin. A.N.F. VOL. I. P. 171) に異端者として記している。なお、Justin はマゴスを “a leader of a heretical sect”. Irenaeus は “the first-born Satan” また “the first of all heretics” といっている。
- 2) 最も初期の教会史家は Dositheus の存在を記明している。しかし決してサマリヤ地方外には流布しなかった。その期間は25年間位である。彼の説はキリスト教異端よりむしろユダヤ派に重点をおいている。なぜならドシテアン派は使徒たちより敵手として考えられている。然し彼の歴史はその教説としての信頼に価する消息は極めて不足している。その名称はエウセビオスの教会史 (H.E. IV. 22) にゲシッポスの異端のリスト中にある。ゲシッポスはパレスティナのユダヤ人キリスト教徒、彼の著書『回顧録』に義人ヤコブ、シメオン等の殉教といったエルサレムの初期教会史が保存されている。旅行家であり、二世紀の中頃ローマを訪れた際、ローマ教会が保存している正統な使徒的信仰に忠実である証拠としてペテロからアニケトウス (154ごろ—65ごろ) 時代までのローマの教皇のリストを最初に作成した。(D.C.B. P.902—3)

- 3) 聖職売買 (Simonia) は、教会における地位や権力をうけるために、贈賄、売収することである。初代教会の迫害時代が過ぎ去り、キリスト教がローマ官制化されると、聖職売買は教会会議でしばしば問題にされた。カルケドン会議 (451) で禁止している。しかし、中世紀に入ると広く行なわれ、この墮落が宗教改革の一因ともなった。英国の教会法 (1604) では、叙任の時、聖職売買の事実がないということを誓うことを規定している。カトリック教会法では、神法上の聖職売買と教会法上の聖職売買の区別がある。前者はそれ自体宗教的なもの、例えば、世俗的なものを代償として得ること、後者は宗教的なものと結びついた世俗的なもの、金品に限らず、種々の便宜や好意尽力を含む、ローマ教会法は種々の法規によって詳細な規定がもうけられている。
- 4) A.N.F. VOL. 1. P. 171. "the First Apology of Justin" 彫像には "Simoni Deo Sancto" (The Simon the Holy God)
- 5) 『聖ペテロおよび聖パウロ行伝』マルケルス著参照 Gérard Walter "Nero" PP. 191—195.
- 6) 仮現説はその形態は種々あるが、この説はキリスト論上の異端に対する総称である。この説の共通の出発点は、質量は悪であって、罪の原因である。従って天の父なる神の聖子との位格的ではあり得ないと説く。イレナエウスによれば、二世紀の終りごろに四つの形態における仮現説の異端が生じている。①人性となったイエスはキリストの仮りの宿に過ぎなかった。(受洗より十字架にかかるまで)。②キリストの肉体は、ただ仮象的なもの (*dokein* = 仮現する, *Phantasiastae*) であった。③キリストは一つの可視的肉体を有したが、彼はこれを処女マリアからではなく天からもたらし、あだかも一つの管を通過するように、処女マリアを通して (*Per Virginem*) 来たのである。④キリストは十字架にかかったのではなく、彼が自己の姿を与えたキレネのシモン (*Adv. haer. 3, 16, 51, 24, 4. A.N.F. VOL. 1. PP. 318—9*) であった。キリスト仮現説はユダヤ派と並んでキリスト教における最古の異端である。これと闘ったものは、既にパウロ、ヨハネがあったが、さらにアンテオケのイグナティウスもの仮現説に対して注意を喚起している。キリスト仮現説の代表者と称すべき異端者は、シモン・マゴス、サトルニウス、ケリントス、バシレイデス、ヴァレンティヌス、マルキオン等がある。これらのグノーシス的キリスト仮現説に対して、イレナエウス (*Adv. haeres*)、ヒッポリトウス (*Philosophumena. 6.8—10*) が闘い。マルキオンに対しては主としてテルトウリアヌス (*Adv. Marc, Adv. Valent, De carne Christi*) が闘い、マニ教のキリスト仮現説に対してはアウグスティヌス (*De haer, Contra Faustum*) らがある。
- 7) A.N.L. VOL. III. PP. 196—7.
- 8) A.N.F. VOL. III. PP. 215—6. VOL. V. P. 76.
- 9) エビオニズム (エビオン派) 厳格な唯一神教の伝統を守ってきた原始教団のユダヤ人キリスト教徒にとって、十字架につけられたイエスが神の子であるということは躓きの石であった。ユダヤ戦争の勃発によってヨルダンの東方に逃れたキリスト教徒の集団の中には、このようなユダヤ的伝統が強いキリスト教がひろまっていた。

これを一般にはエビオン派と呼ばれている。歴史上の人物としてのイエスと教会において宣教せられる超越的存在としてのキリストとの関係は歴史的にも神学的にも、初代教会より現代にいたるまで人間の知性のふみこむことのできない謎でありつづける。

エビオン派の教説の内容は、イエスはメシヤ、至高の律法的賦与者ではあるが、神にえられたまことの予言者であってヨセフとマリアから生れた「ただの人」にすぎない。彼は神から生れた先在者ではなく、神の被造物であるというのである。